

コラム

タンザニア農村調査余話

香 月 敏 孝

夏になるとタンザニアを思い出す。

初めて訪れたのが、1987年。開発援助下の稲作農民の実態を調査する目的である。

乾季だった。枯れ草のにおいが漂う中を、猛烈な砂ほこりを巻き上げて現地に向かう車から見たのは、からからの大地、立ち枯れたトウモロコシ、痩せ細った牛の群である。自然の厳しさは印象的である。しかし、もっと強烈な印象を受けたのは、やはりこの国の人たちである。

仕事は、カヤンダ翁探しから始まった。これに3日かかった。予め会いたいと伝言していたが、回教徒寺院に出かけ不在。次の日も町に買い出しに行っていない。調査に最も協力的な農民リーダーに会えないのである。ようやく捕まえた彼の尻をたたくように車に乗せ、〇日、〇時に圃場に来て欲しいと農家を巡り歩いて調査のセッティングを行う。

しかし、調査の初日、満を持して圃場で待つも、農民は誰1人現れないのである。「どうなってる？」との問いに、調査員である現地スタッフが涼しげに答える「スワヒリ・タイム」。わが国でも会合には遅れてくるのが礼儀みたいな「博多時間」なんてあるが、こちらの方が上手である。1時間半ほどでぽつんと1人がやって来た。

「今日の予定ではないかも知れないが」と申し訳なさそうな表情を浮かべている。とんでもない。とても有り難いのだ。こうして、この国の人たちのペースに合わせた調査がゆっくりと始まった。

「アフリカの水を飲んだ者は、またアフリカに帰ってくる」のだから。2度目の訪タンは1991年。同じ農家の追跡調査である。

最初の調査で懲りた分、2回目の調査はいくらか楽だった。不思議なことに、前回調査の結果と比べると、農地、家族数が急に増えている農家がある。事情を尋ねると、「前は息子が答えたんだろう。息子は自分の農地しか頭にない。まだ相続させていないが、息子の分を合わせた面積は……」。「前回調査の時には第2婦人とその子供たちについては、聞かれもしないし答えなかったんだ。それも合わせ

れば……」といった説明が返ってくる。日本の場合とは家族の形態が異なるし、世帯と経営単位とが一致しないこともしばしば起きる。前回結果を修正しながらの調査となった。

「2度あることは3度ある。」まさかそんなことはないだろうと思っていた。これも現実となり、やや間を置いた1999年が3回目の調査である。

たびたび足を運んでいるうちに、すっかり顔なじみになった農民も少なくない。87年の調査の時も、この農家のこの庭先のテーブルに腰掛けて話を聞いた。そう思いながら、度の合わなくなったメガネを代える。すると農民も調査員スタッフも老眼鏡を取り出したではないか。お互いに年を取った。歳月の流れを感じずにはいられない。

今回の調査は僅か10日ほど。3カ月、2カ月かけた前2回と比べ、あわただしく終わろうとしていた。そんな折り、87年調査で運転手をしてくれたリンジェが宿に訪ねてきた。

この国では珍しく中学校を出ていて英語もしゃべるくせに、運転が好きだからドライバーになったという彼だった。87年の滞在中、彼も時間をもてあましていたのだろう。あちこちと町の中を引き回してくれた。スラム街の一角にある彼の下宿にも行った。暗い土間にベッドだけの息が詰まりそうな部屋である。「今日、ようやく電気が通った」と嬉しげに、胸から取り出した電球は親指ほどの大きさでしかない。

普段は快活な彼が、ある日、ふと漏らした言葉が忘れられない。「この国の公務員の給料じゃ、2倍あっても10倍あっても良い生活なんか出来やしない。」涙を浮かべていた。

その彼が、又しても家に案内したいという。結婚した子供も見たいと。新居は、少しずつ材料を買ってきては自分で造ったという。豪邸とまではいかないものの、ゆったりとした明るい間取りで、私の想像を遙かに超えた羨ましいほどに立派な一軒家であった。圧倒される驚きである。

この国には分からないことが多すぎるのである。このほど、前2回の調査結果を踏まえてまとめた1999年調査報告書を国際農林水産業研究センターから刊行してもらった（「国際農業研究情報」No. 21）。どこまで現実を捉え切れたのか、正直のところ、自信はない。